

「必ず受け止めてくださる愛」ルカ15章11～24節

ルカによる福音書15章11節から、父と息子の例え話が始まります。このお父さんは、私たちの父なる神の姿を表しています。息子は、私たちの姿です。

息子の家には、父と、後に家を継ぐであろう兄がいました。財産を手にして家出をしたことから、父と兄の権威の下から自立したい、早く自由になりたい思いがあったのかも知れません。息子は自分の持ち物（財産）に頼って、自分の道を歩き始めました。しかし、自立とは程遠い未熟な行動で、一時の快樂のために財産を使い果たしてしまいました。お金が無くなったとき、息子は初めて孤独や挫折を経験したのです。

深い悩みの淵、どん底のような経験をするとき、それに対して差し出される選択肢として3つ程あげてみたいと思います。

- ① 自分の力で解決できるようにがんばる
- ② どん底の状態に留まる
- ③ 自分の力でもそのまま留まるでもなく、確かなものにすぎる。

この息子は③の選択をし、自分を養ってくれるであろう父親を頼ることにしました。どん底で苦しんだとき、「父のところではあんなに大勢の雇い人に、有り余るほどのパンがあった」と思い出しました。彼は正気に戻って、お父さんにごめんなさいして、お父さんのもとで養ってもらおうと決心し、向きを変えて家路に着きました。

一方、お父さんは好き勝手に生きたそのドラ息子（子）の帰りをずっと待ち続けていました。家からだいぶ離れていたのに息子の姿を発見し、憐れに思って我先に走り寄りました。憐れに思うとは、はらわたがちぎれる程に辛く苦しい思いをするという意味だそうです。変わり果てた息子の姿をかわいそうに思ったお父さんは、手を広げて息子を抱きしめ、すべてを受け止めました。息子はそんな風に迎え入れられると思っていなかったでしょうが、様々な思いが入り混じって涙を流したのではないのでしょうか。

息子は父の温かい抱擁を受けた後、罪を告白し、「雇い人の一人にしてください」と頼みましたが、父は息子を赦しました。そして、雇い人ではなく子としての身分の回復を与え、しもべ達に言いつけ、息子を立派な身なりに装いました。良い服→キリストの生き方・新しい生き方・救い、指輪→立場の特権、履物→新しい歩み、を表しています。私たちも、神様に「ごめんなさい」と罪を告白するときに赦しが与えられ、古いものから新しい服に着替えさせてくださり、神の子という身分を与えてくださるのです。

また、息子が帰ってきたとき、お父さんは「何をしていたんだ。自業自得だ。」と責めることも、みすぼらしい恰好をそのままにして、皆の前で恥を負わせることをしませんでした。息子に安心を提供し、安全を保障しました。反対に、みんなから責めや辱めを受けた人をご存知ないでしょうか？そうです、イエス様です。イエス様は死刑になるような罪は全く犯されませんでした。皆からののしられ、侮辱されながら、私たちの神様への背きの罪を代わりに背負い、その罪を償うために十字架にかかってくださいました。イエス様

が責めも恥も背負ってくださったゆえに、神は私たちからもそれらを取り除いてくださいました。神は、御子イエスを通して私たちをご覧になっているのです。神様の下は本当に安心・安全な場所です。

私たちは、この息子のように放蕩の限りを尽くしたことはないかもしれませんが、しかし、たとえ身なり（外側）はきちんとしていたとしても、内側は傷つき穴があいていることがあります。修復しないといけません、気づけない状態になっていないでしょうか。今の世は“何でも有り”な世の中、黒でもなく白でもなくグレイゾーン、冷たくもなく熱くもなく、なまぬるい状態かもしれません。無意識に世に身を任せていたら、世に添った生き方・思考になり、この身はダメージを受け、汚れてしまいます。この世に添う、倣うことは神様から離れることを意味し、聖書では罪といいます。ですから、罪を犯さないためにも、罪の赦しを得るためにも、私たちはいつも神様の元へ行って抱えている現状、この心を打ち明け、受け止めてもらう必要があるのではないのでしょうか。

神様は、「私はあなたを助けたい、汚れた服ではなくいちばん良い服を着せたい。私の目にはあなたは高価な存在。私はあなたを造ったとき、非常によい！と喜んだ。なのに、どこにいるの？ どうしたの、その姿は？ 私の愛する息子、愛する娘よ。」と語りかけてくださっています。この言葉は真実です。しかし、躊躇される方がいるかもしれません。

今さら何と言えればいいのだろう…大丈夫です。言葉にならない呻きで主は執り成してくださいます。（ローマ 8：26～27）

会わせる顔がない…大丈夫です。主はあなたのどんな表情も見せて欲しいのです。

その美しい顔を隠さないで出てください。（雅歌 2：10～13）

うまく説明できない…大丈夫です。モーセだって、口下手ながら神様とはお話しできました。そして神様は“神様”なので、あなたの言わんとすることを知ってください。（出エジプト 4章）

父なる神は私たちの帰りをとても喜んで、祝宴を開いてくださるほどです。神様は躊躇せず、拒まず、しっかり受け止めてくださいますから、その安心・安全という居所で心を注ぎ出しましょう。出したそのスペースには、神様の満たしがあります。だから、神様の前に出すことを恐れなくていいのです。良いお方が良いものをくださるのだから、泣くことも恐れなくていいのです。

泣ける相手がいることは本当に幸せなことです。独り言のような嘆きも、愚痴も、「神様…」と呼べば目の前に来て相手をしてくださって、その涙を聴いてくださいます。いつのまにか、もう一人ではなくなっているのです。

父なる神のもとに留まり、愛、赦し、回復、元気をいただきましょう。

そして、父なる神の思いに触れて、変えられて、神様に栄光をお返しする人生を歩いていきましょう。シャローム！